序

人がある事業とか仕事あるいは作業といったものに携わる場合に資格，免許を必要とする事がある．これらは何らかの専門的な知識とか技術がなければ，他に危害を与える恐れがあるとか，社会的に重大な問題を起こす可能性があるような場合に必要とされる事が多い．それだけに人は資格，免許を有する事によって，一般には許されない事ができるわけで，それだけ活躍できる場も広く，尊重されることになる．ある人に何かを委ねようとする場合に，間違いなくそれを遂行してもらえるか否かを知るには，必要な資格の有無を確かめればよい事になる．敷衍すれば学歴もこうした資格の一種と考えられる．就職に際して必ず履歴書の提出が求められるのもこうした学歴，資格，免許などでその人の資質，能力を判断しようとするわけである．本来，資格が幾ら沢山あっても，人の価値はそれによって決まるわけではないが，ある資格によってその人の特定の能力が分かるのは便利ではある．従って世の中には，本当に自分がやりたい為と言うよりも寧ろ自分の能力の指標として，只資格取得だけに強い関心を持つ人もでてくる．いわゆる肩書魔と言われたりする人である．

こうして，社会が複雑になり専門化も進み，誰にでもできる仕事はむしろ少なくなるにつれて，資格や免許の種類も次第に増え，その取得も難しくなってくることであろう．そしてかつての中国の科挙のように試験方法だけが精緻になってしまうような問題も起こって来る．

しかし，より本質的な問題は人間の社会活動には，どのような資格を以てしても遂に及び得ぬ行為が残ると言う事である．元来，資格の対象となる行為は，その内容が明確に定義されているか，専門化されたものに限られる筈である．例えば，太宰　治は「人間失格」を宣言して自ら命を絶ったが，人間の資格をそれ程，限定的に捉えられるのかどうか疑問である．寧ろ資格では問えない所に本当の人間の創造的営みがあるのではなかろうか．逆説的に言えば，資格の対象になり得ない行為にこそ，挑戦すべき多くの未知の課題が潜んでいるのである．このように考えると正に専門的知識や技術を必要とし且つ創造的行為であるべき研究において，それに携わるには，果たしてどのような資格があると言い得るのであろうか．少なくとも研究者は肩書魔であってはならないような気がする．

1990年10月

清水建設㈱技術研究所長

工学博士　太　田　利　彦